

○立花吾孺の森小学校の校庭(校門)には、二宮金次郎の銅像があります。実はとても有名な人です。どんな人なのかを絵で説明したいと思います。



○金次郎は小田原の近くの大きな農家「二宮家」に生まれました。今から238年前のことです。武士の時代でしたが、二宮という名字をもち、作物が多く取れる田畑を持つ、村のリーダーである両親のもとで金次郎は弟二人と幸せに暮らしていました。



○ところが近くを流れる大きな川が洪水で氾濫し、村は作物が作れないほど荒れてしまい、金次郎の家は一気にどん底のまずしい暮らしとなってしまいました。



○更に一家を支えていたお父さんが病気で働くことができなくなりました。まだ10歳だった金次郎は、大人にまざって川の堤防工事に出たり、夜は工事人のための「わらじ」を作ったりして一生懸命に働きました。



○しかし、その努力もむなしく、両親は亡くなってしまいました。金次郎の兄弟は親戚に離ればなれになってあずけられることとなりました。金次郎はきびしいおじさんの家で働きながら過ごすことになりました。実は金次郎は小さい頃から本を読むことが大好きで、そこからいろいろな知識を得ていたのですが、このおじさんは本を読む時間があるなら、田んぼや山でもっと働けと金次郎に言ったのです。金次郎はそれでも一生懸命勉強しました。銅像の有名なポーズはその時のものです。山に「たきぎ」を取りに行くときにも往復の山道で一生懸命本を読みました。



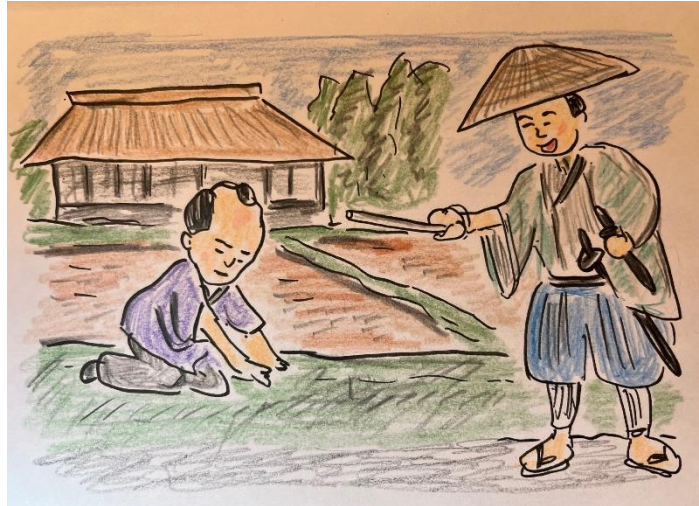
○また、寝る前は、油の明かりで暗い布団の中でこっそりと本を読み勉強しました。こうして様々な知識を身に付けた金次郎は、もう一度兄弟みんなで暮らすのだと、お金を作
るための努力をし始めました。



○例えば、ある時、油をしぼるために菜の花の種をもらいました。普通ならばすぐにそれ
をしぼって油にするのですが、金次郎は畑にそれを撒き、翌年その何百倍にもして収穫し
お金を換えました。大きな石がゴロゴロして使い物にならなかった田んぼも自分できれ
いに整備し、お米を一生懸命に育てました。努力に努力を重ねて、再び二宮家は豊かな農
家になったのです。



○そんな金次郎のことを小田原藩(はん)の偉いお侍さんたちが注目しました。藩の財政を立て直すことに力を貸してくれるように頼んできたのです。名前も金次郎から「たかのり」尊徳というお侍さんのような名前をもらうところまで出世をしました。(今の時代の人には親しみをこめて「そんとく」と呼んでいます。)



○さらに小田原周辺だけでなく今の栃木県日光の近くで困っている町を復活させるプロジェクトの責任者に金次郎を選びました。金次郎は期待にこたえ、多くの村の財政を豊かにして行きました。

今でも日光周辺の人たちは二宮金次郎のことを尊敬しています。金次郎は今の言葉で言えば「町を元気にするためのさまざまな方法を考え出すプロ」だったのです。



○そんな、家族のため、村のために一生懸命に勉強し、働いた金次郎のことを、戦前の小学生は、学校で必ず学びました。子どもたちに目指してほしい姿だったのです。そして、全国の小学校に金次郎の銅像が建てられました。ところが戦後、多くの小学校の校庭から金次郎は消えていきました。もちろん古くなってこわれてしまったものもありました。でも、多くの場合は戦争中の教育に使われていたもの無くしてしまえという考えから、どこかされてしまったものが多いのです。



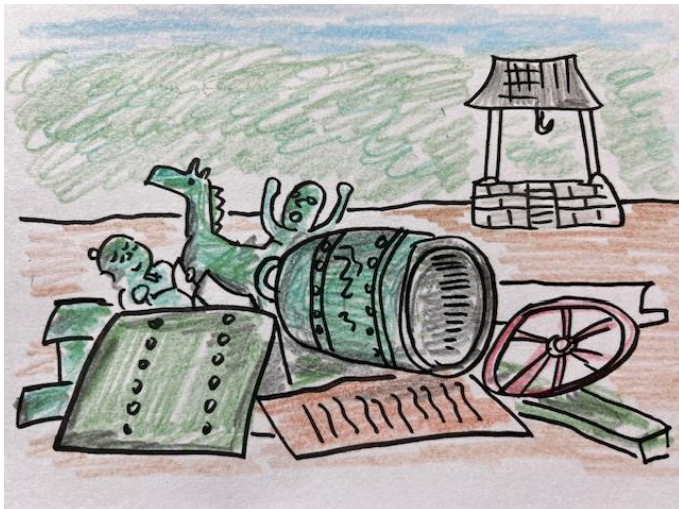
○5年前、初めて立花吾孀の森小学校に校長先生が来た時、校門で堂々と子供達を見守ってる金次郎を見て驚きました。「よく元気でいたな」と思いました。それもとてもきれいな状態の銅像です。



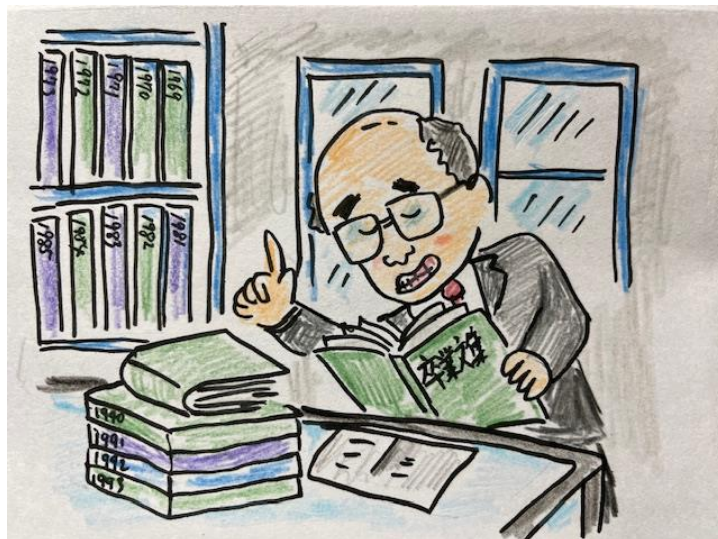
○実は、立吾小の金次郎さんには兄弟が日本中にいることがわかりました。同じ顔をした金次郎さんが、たとえば愛知県の学校にもいます。また、三重県にもいます。同じ顔ですね。調べていくと、この金次郎さんは、村上鉄堂という明治時代から大正にかけて石川県で活躍した彫刻家が原型を作ったものだとなりました。それを富山県の高岡で銅像にし、戦前から全国の多くの小学校に銅像として建てられていたのです。



○ところが、戦争中、武器を作るためにたくさんの金属が必要になり、日本中から金属がどんどん国に取り上げられていきました。金次郎さん銅像だったので溶かされてしまったのです。



○校長先生は立吾小の金次郎さんのことをもっと詳しく知りたいと思いました。資料室にある古い記念誌、写真など調べましたが、金次郎の銅像のことを説明したものは一つもありませんでした。写真も残っていなかったのです。



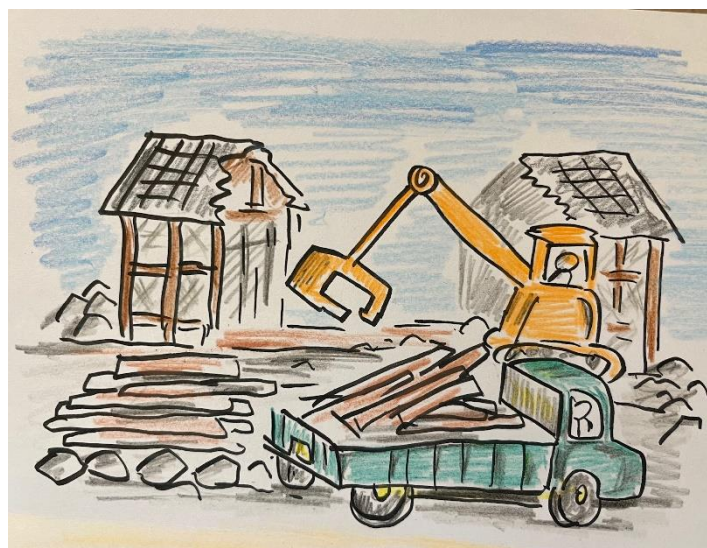
○ここから先は、先生がいろいろな人に話を聞いて、それをもとにして考えたことです。今、東吾孺小学校がある場所に、戦前の第一吾孺国民学校が建っていました。その校庭にも金次郎さんの銅像があったのだと思います。ところが戦争で校舎もすべて焼けてしまいました。(立吾小の場所には、橘国民学校が建っていましたが、空襲で廃校となりました。)



○戦後、橘国民学校の跡地に木造校舎で第一吾孺小学校が再び開校しました。その時に、富山で金次郎の銅像を作ってもらい、ピカピカの金次郎が戦後の新しい木造校舎の校庭に復活したのです。今の校長室前のあたりに立っていたことを覚えていてくれた方がいました。（金次郎銅像の原型の作者は村上鉄堂さんです。戦後作成されたものには、「鉄堂」という刻印があるので作られた時代が分かります。戦前のものは手書きのサインになっています。）



○ところが一吾小の金次郎銅像の苦難が始まります。しばらくして子供の数が1000人を超える時代がやってきます。木造校舎ではせまくなってきたのです。そして昭和30年ごろ、今から70年前ぐらい前、2階建ての木造校舎が順番に取り壊されることになります。大きなコンクリートの校舎に生まれ変わっていったのです。金次郎さんの銅像はどうなったと思いますか。



○そうなのです。台座から外され、倉庫にしまわれてしまったのです。それから50年間、金次郎の銅像は、表に出てくることはありませんでした。それよりも第一吾嬬小学校の倉庫にかくれている学校の怪談として、子供たちの「きもだめし」のターゲットにされながら、悲しい時間を過ごしていたのです。当時の子供達は、倉庫のドアをそっと開けて、「キンジローだ」とさけびながら逃げていたのかもしれません。



○そして、平成20年に立花吾妻の森小学校が開校することになりました。開校前に初代校長の佐藤準一先生がきれいに整備された校舎内を点検して歩いていた時のことだそうです。階段下の倉庫がいつも閉まったままになっているので気になって、何が入っているのだろうかと開けたのだそうです。そこにはほこりをかぶった綺麗な状態の金次郎さんが助けを求めて横たわっていたのです。



○佐藤校長は、この銅像をしっかりと台座の上に建て、再び子供達を見守れるような場所、校門の前に置くことに決めました。そして立吾小開校直前の1月にその除幕式をしました。

金次郎の教えにも通じる言葉、「自学自修」の文字もそこにつけました。自ら学んで、身につけた知恵で自分の生き方を自分で切りひらいていくという考えです。



○金次郎の夢は兄弟(家族)が再び幸せになることと、村を豊かにすることでしたが、立花吾孺の森小学のみんなも自分のもっている夢をかなえるためにたくさん学び、つらいことがあっても、知恵と工夫で乗り越えていってほしいのです。そんなみなさんのことを今日も校門で二宮金次郎の銅像がむかえ、応援してくれているのです。

くじけそうになった時、つらい時、金次郎の銅像を見上げると勇気が出てくるかもしれません。

令和7年3月24日 卒業式での式辞をもとにして作成
立花吾孺の森小学校 校長 向井一郎